

見た目を整えて自分らしく

「眉毛は骨のある場所に沿って描くのがポイント。ウィッグ（かつら）に合う色を選びましょう」

6月中旬、神奈川県鎌倉市の湘南記念病院の一室。NPO法人「ソシオキュアアンドケアサポート」（東京）の理事長・光江弘恵さん（56）が、乳がん治療のために通院している女性（56）にメイクのコツを教えている。



光江さんからメイクの仕方を教わる女性（右）（湘南記念病院で）

がん患者が、抗がん剤や放射線による治療の副作用で、脱毛や爪の変色などに悩むことは珍しくない。周りの目が気になったり、自分らしさが失われたと感じたりして、気持ちが落ち込んでしまう。

同法人は、首都圏の医療機関などで、こういった見た目の変化によるがん患者の苦痛を軽減する「アピアランス（外見）ケア」を無料か低額で提供している。光江さんは「ソシオエステティシアン」。日本エステティック協会が認定する資格で、医療や福祉の知識を生かして、闘病中の人たちに美容の情報提供や施術を行うことがで

きる。同病院での活動は昨年11月から月1回のペースで続けている。

女性の場合、今春、乳がんの手術を受けた。その後、再発予防のために抗がん剤治療を始める、髪の毛やまつげ、眉毛が徐々に抜け、この日は、そんな闘病の経過を話しながら、光江さんに手や爪の手入れもしてもらった。

抗がん剤の副作用で起こる爪のトラブルを防ぐためには、手も含めた保湿が重要だ。オイルを塗ってマッサージしてもらった女性は「治療中もおしゃれができる工夫をたくさん教わった。おしゃべりも楽しかった」と満足そうに話した。リラックスできる空間で交わされるのは、楽しい会話とは限らない。「何で自分がかんになったのか」「これからどうなっちゃうのかな」など、闘病に伴う不安

から涙を流す患者も少なからずいる。

光江さんは、「見た目の悩みに限らず、苦しい気持ちを少しでもはき出してもらいたい。自分らしさを取り戻すお手伝いができたらうれしい」と話す。

アピアランスケアは、比較的新しい分野だ。国は、3月に閣議決定した「第4期がん対策推進基本計画」で初めて、具体的な課題と取り組むべき施策を盛り込んだ。今後、全国のがん拠点病院などを中心に、アピアランスケアについての相談支援や情報提供体制の構築を検討する。

同病院乳がんセンター長で乳腺外科医の土井卓子さんは、こうしたケアの意義について、「容姿の悩みが解決されないことで、治療への意欲が低下してしまう患者もいます。以前と変わらぬ自分でいられることは、命を守るための治療の継続や、心を支えるためにとても重要なことです」と話している。